

第5編

入学試験の変遷



柿

入学試験の変遷

吉岡敏子(元専任教員)、月本規子(事務係長)、石塚睦子(教務主任)

昭和 32 年から設置された東京医科大学病院附属准看護婦学校は、昭和 40 年から廃校予定となり、当時数少なかった准看護婦学校の教職員は、東京医科大学附属高等看護学校の開設に向け、入学試験の企画その他のため日夜準備に追われていた。開校当時の受験料は、1 人 500 円、入学金と月額授業料は、各々 1 人 1,000 円という時代であった。因みに現在は、受験料が 20,000 円、入学金が 100,000 円、授業料は年額 320,000 円、教材費 60,000 円となっている。

募集定員数は、昭和 39 年入学の第 1 回生から 5 回生までが 25 名、6 から 10 回生が 40 名、11 回生が 50 名、12 回生から以降現在まで 80 名となっている。

受験者数と合格者数の推移については、表 1 に示した。受験者数は、時を経て徐々に増加し、受験者数が最も多かったのは、平成 2 年度入試の 27 回生の時で 1138 名、次いで平成 6 年度 31 回生の 1124 名であり、その当時は、記念会館だけでは受験者を収容できず、看護専門学校全ての教室も使用して試験が行われた。その後、18 歳人口の減少や看護系大学の設置増加に伴い、受験者数は減少傾向となったが、二次募集することなく順調に定員数の確保を維持しながら今日に至っている。

入試方法については、学生定員数が 40 名に増員された昭和 44 年入学の 6 回生から、入学者の確実な確保のため 1 月の一般入試だけでなく、青森で秋の推薦入試が導入されることになった。その後、推薦入試は、10 回生の頃から青森だけでなく九州でも行われるようになったが、しばらくして東京の校舎でのみ行われるようになり、現在に至っている。毎年、クラスの約半数の学生は推薦入試の合格者で構成されている。

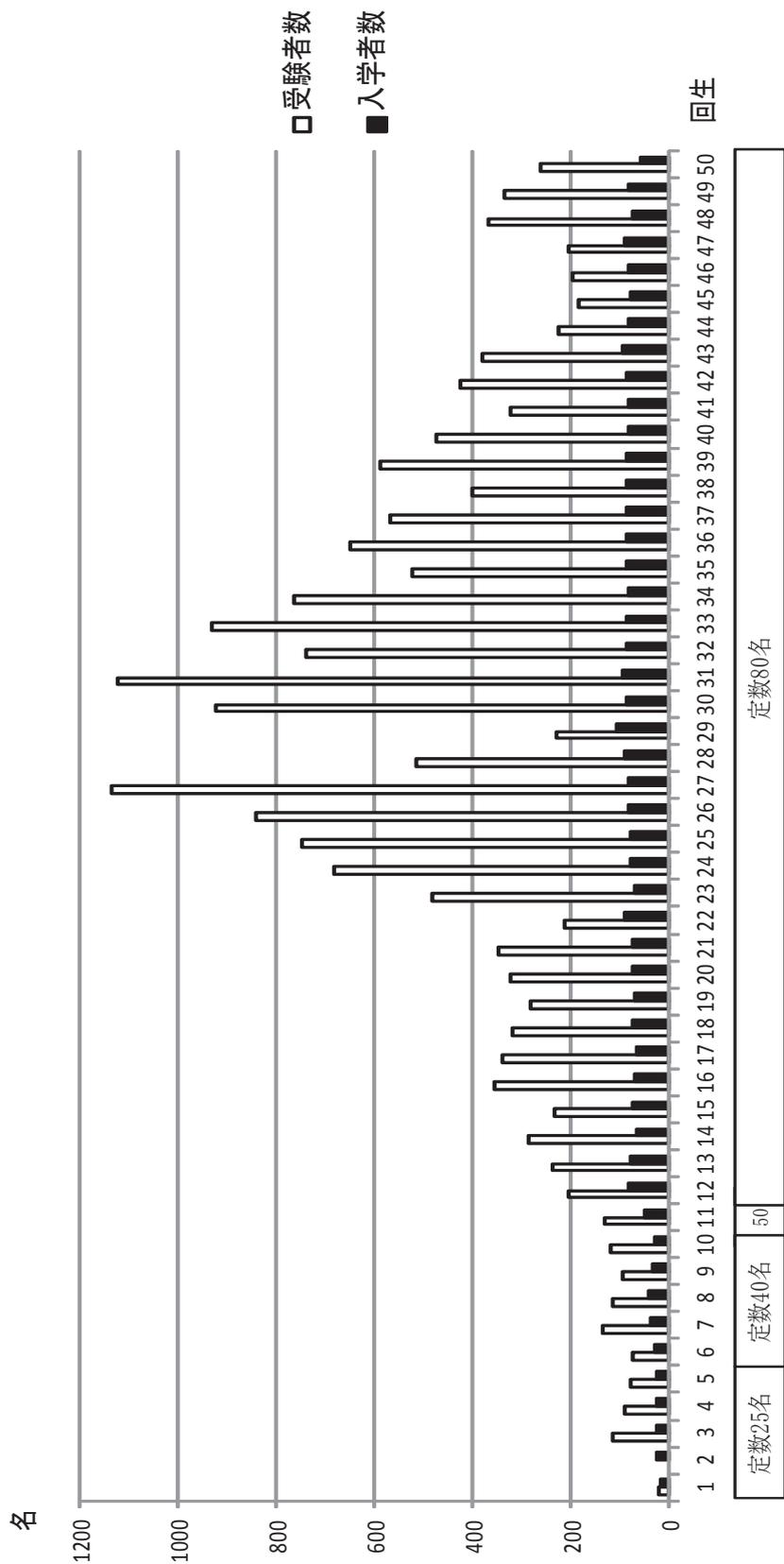
また、6 回生の入学年と同時に准看護婦に看護婦国家試験受験資格を授与するための 2 年課程別科(5 回生まで)が併設され、引き続き 11 回生が入学した年の 9 月から夜間 3 年課程の進学科(10 回生まで)が定員数 40 名で併設された。

入試科目については、当初、一般一次入試の科目は国語 I・II、数学 I、英語 I・II、理科(生物または化学のうち 1 科目選択)の 4 教科であったが、途中で選択科目の内、化学がなくなり、その後の選択科目は生物か数学となっている。二次試験では、面接と健康診査となっていたが、健康診査は現在行われていない。一方、推薦入試は、当初、小論文と面接のみであったが、途中から小論文と面接に英語が加わった。また、推薦資格として長らく現役生のみだったものが、近年 1 浪まで可となり、高等学校 3 年間の欠席日数が 6 日以内の規定であったところは、現在規定はなくなっている。5 段階評価は 3.6 以上だったものが、現在 3.3 以上に変更されている。その他、かつては身長 150 cm 以上の規定があったが、31 回生からその規定はなくなった。また、かつて矯正視力 1.0 以上、加えて「卒業後、東京医科大学病院に勤務可能な者」と明記もされていたが、現在その明記もない。

男子の入学生の受け入れは平成 5 年度からで、平成 5 年度に初めて 2 名の男子学生が入学しており、翌年からはほぼ毎年 1~5 名の男子入学生を迎えている。

専門学校における社会人経験者、大卒、大学院卒の割合は、近年増加傾向にあり、本学では 20~30%を占めている。

表 1. 受験者数と合格者数の推移



※受験者数は推薦入試と一般入試の合計数である。2回生のみ受験者数が不明

下記は、昭和 45 年 3 月 26 日に行われた別科 1 回生の入学試験、合否会議、合格発表の写真である。



入試風景(東京医科大学第 9 校舎にて)



合否会議 左から与謝野光先生、久保田きみ副看護部長、小原良衛看護部長、川口(山田)よね子先生



合格発表(病院敷地内の高等看護学校入口)